

FSCの設立趣旨

土地、植物、動物及びそれらを取り巻く環境を生命系として教育・研究を行うとともに、これらの研究成果を通して、広く地域社会の発展に寄与することを目的とする。

八雲牧場の近況

放牧開始／一番草の収穫

この春は雪解けも早く、肥育牛たちは5月8、9日に町営育成牧場に放牧されました。

場内の繁殖牛や育成牛は電気牧柵の設置が済んだ牧区より順次放牧しています。

青草の香りが場内を漂い早く出せと言わんばかりに毎日人の顔を見て鳴いています。



写真上：育成牧場での放牧

6月には一番草の収穫が開始されました。例年グラスサイレージを2000トン、ロールベールサイレージを一〜三番草で1000個収穫します。

特にグラスサイレージは場内ではバンカーサイロに収納しますが、肥育牛舎にはサイロがないため委託してチューブサイロを作成します。



写真：チューブバックでのサイレージ調製の様子

“東北フリースdayいわて”に参加しました

東北初、フリースにまつわる人々の集まる場

6月2日に盛岡市で開催された“東北フリースdayいわて”に参加しました。このイベントでは、羊生産者や作り手（作家やスピナーや羊毛加工者）が気軽に交流する機会として、東北で初めて開催されました。東北地方の羊生産者12戸が参加し、フリースや羊毛の販売ブースや、羊の毛刈り実演、モンゴルのゲル（羊のフェルトが素材）の展示もありました。

フリースとは、1頭の羊から刈り取られたひとつながりの羊毛という意味で、11戸の羊飼育者が自慢のフリースを出展し、一般の来場者が手触りや色合いを評価して人気投票が行われました。

十和田農場でも自慢のマンクス・ロフトン種のフリースを出展し、来場者は一緒に貼り出した写真や羊の特徴を記載した履歴書を見ながら熱心にフリースと向き合っていたように感じました。ま

た、羊や羊毛にかかわる人たちの生の声を聴き、忌憚ない評価を受けて生産者としての手ごたえも感じました。

会場では、飼養頭数の少ない品種の維持に対する大学への期待の声も聞かれました。様々な形で地域に貢献できると嬉しいと思います。



写真：来場者が真剣にフリースに向き合う様子

今号のどうぶつ紹介



カムイ(左) ピリカ(右)
(サフォーク種)

5月末に北海道からやってきた羊の種雄候補の2頭をご紹介します。去年生まれの双子で、十和田に来てからずっと2頭でぴったりくっついて過ごしています。北海道出身ということで、馴染みのあるアイヌ語を借りて、カムイ(神)とピリカ(かわいい)と名付けました。種雄のわりに気性が穏やかで、給餌の際には2頭そろって駆け寄ってきます。

雑草防除の見方？

八雲牧場の草地は有機管理を行なっているため除草剤の使用ができません。そのため種子の追播で防除する方法などを検討してきました。

そんな中エゾノギシギシを特異的に採食する昆虫が増加してきました。おそらくコガタリハムシかと思われる甲虫ですが、もの見事にエゾノギシギシの葉脈だけを残し食べきます。今後の活躍に期待です。



写真：エゾノギシギシを採食するコガタリハムシ？

羊の母となる

十和田農場の羊の分娩が終了

十和田農場では5月末から始まった羊の分娩が、6月末にようやく終わりの一息ついたかと思えば、同時に人工哺乳が始まり気の抜けない日々が続いています。

今年は昨年の実験の影響で分娩が例年より2か月ほど遅くなり、羊生産ではなかなか6月の分娩となりました。暑さが懸念されましたが、さほど影響もなく、大きな事故もなく、サフォーク種13頭、マンクス・ロフタン種10頭が元気に育っています。

しかし、順調そうに見えた今年の分娩ですが、母羊の乳が出なかったり、子羊を攻撃してしまう母羊がいたりして、4頭の子羊たちの人工哺乳をすることになりました。4頭とも生まれてすぐお母さんと離れることになったので、1日4回の授乳に追われる日々となりました。

その甲斐あって、子羊たちはこれまで順調に成長し、哺乳瓶での飲み方もみるみる上達しました。今では、人の足を見かけると所構わず突進してくるやんちゃキッズです。

子羊の成長はあっという間なので、このかわいい時期にぜひ皆さんも会いに来てみてください！



写真：哺乳瓶を取り合うマンクス・ロフタン種の子羊に授乳している様子

次号の予定と編集後記

新学期を迎え早くも3ヶ月が経過し、一年の半分が過ぎ去りました。十和田農場では、春の採草や分娩、実習などが立て込む一年で一番慌ただしい時期を終えようとしています。

そしてやってくる夏本番…動物たちにとっても職員たちにとっても厳しい季節になりそうです。

(編集：岩城)